

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	河野 元子
論文題目	マレーシアにおける開発と地方政治 ー トレンガヌ州にみる UMNO 体制の生成と展開 1961-2008 ー		
(論文内容の要旨)			
本研究は、東南アジアのマレーシアにおいて、独立後第一回の選挙より一貫して長期政権を維持する UMNO(統一マレー国民組織)の政治体制の特質を、マレー州トレンガヌの事例から歴史的に明らかにしようと試みている。 第1章では、目的と問題背景が述べられる。これまでの東南アジアにおける開発体制や開発主義に関する研究は、新興独立国家が経済成長を重視していたという現実とあいまって、経済面に重きをおいて論じるものが多かった。それに対して、本研究では、開発は政治的現象であるという観点から、現地での長期定着調査と文献調査によりながら、国家主体の開発と UMNO 支配体制の関係を重視する。開発の進行により地方に広がった UMNO の利益政治の仕組みが、どのように形成され、維持され、変化してきたのか。また、マレー人社会はその長期政権をどのように受け入れてきたのか。これが解明しようとする問いである。 第2章では、国家主導の開発がはじまる以前のトレンガヌにおける政治経済状況について概説される。トレンガヌは、植民地時代から独立後を通じて、資源不足ゆえに周辺化された後進地域となってきた。そのトレンガヌで複数の政党が出現し、その中から頭角をあらわした UMNO が州政権を握って、土地開発と絡んだ利益政治をはじめめる状況が明らかにされている。 第3章では、開発の推進がどのように不満を生み出していったのかが考察される。1971年に導入された新経済政策 NEP は、経済成長をもたらすことに成功し、民族間格差をある程度緩和していった。しかし、トレンガヌでは油田発掘が UMNO 州政権による利益政治を増大させ、新しい格差を生み出した結果、社会的亀裂を発生させることになった。この新しい格差がどのように生じ、不満を醸成していったのかを、漁村における漁業行政とくに経済援助の展開に着目することによって解明している。 第4章では、格差の出現を受けて、トレンガヌで UMNO と PAS(汎マレーシア・イスラーム党)の対立が激化していく歴史過程を素描している。UMNO が社会のニーズにあわせた利益政治を推進する中、PAS の勢力は後退した。PAS がイスラーム復興運動の台頭やカリスマ的リーダーの登場によって勢力を盛り返してくると、UMNO は政策としてのイスラーム促進とバラマキなどの利益			

政治に力を入れることによって対抗しようとした。UMNO が苦戦を強いられた背景には、NEP の恩恵を受けた部市近郊在住者をはじめとした不均等な配分に不満をもつ人々が PAS 支持へ転向したという事情があったことが明らかにされている。

第 5 章では、1999 年にトレンガヌ州選挙で PAS に敗れた UMNO が、州政権の奪回に向けて展開した「賞罰の政治」の実態を検討している。分析の力点は、連邦政府を握る中央 UMNO が州政権奪還のためにいかなる策を講じたのかを体系的に捉えることに置かれている。具体的には、UMNO 連邦政権がトレンガヌ州の政府や社会に規制や圧迫を与える一方で、住民のニーズを積極的に掘り起こして充たす戦術を展開する過程を具体的に解明した。その結果、多元的・多重的な賞罰の仕組みが、特定の為政者や地域に限定されるのではなく、UMNO の支配体制と、また受け手となる社会の両方に組み込まれてきたことを明らかにしている。

第 6 章は、以上の各章によって明らかにしてきたことをまとめ、2008 年総選挙の結果を加味することで、トレンガヌからみた UMNO 支配体制の特色を、主体は個人ではなく組織、問題への柔軟な対処能力、利益政治を展開しうる豊かな資源という 3 点にまとめている。

(論文審査の結果の要旨)

東南アジアのマレーシアでは、1957年にイギリスの植民地から独立して以後半世紀にわたって、UMNO(統一マレー国民組織)を中核とする与党連合が政権を握り続けている。これは選挙が行われなからではない。UMNOは数年ごとに実施される総選挙で、議席数の増減を経験しつつも、勝利をおさめて長期政権を維持しているのである。なぜ、どのようにして、UMNOは長期政権を維持しているのかという問いの解明は、多くの東南アジア研究者や政治研究者にとって焦眉の課題の1つになってきた。本論文はその解明の試みの1つとして、次の点において高く評価しうる。

本論文はこの課題を地方の視角から解明しようとしている。これまでのUMNO体制研究はもっぱら首都ないし全国的な観点から行われてきた。それはUMNOという支配する側、あるいはUMNOに代わって支配しようとする側の目線である。それに対して、本研究は連邦国家マレーシアのひとつの州を取り上げて、支配される側の目線から研究を試みた。地方の住民はUMNO体制をどう眺めているのか。これは従来の研究には不足してきた視点を補う斬新な企てであり、高く評価しうる。

第二に、調査地として、トレンガヌを選んだ点も評価に値する。マレーシア政治はマレー人、華人、インド人の間の民族関係から分析されることが多い。しかしながら、近年はマレー人同士の対立が目立ち始めている。その主因は、地域差や階層差であり、イスラームをめぐる意見の食い違いである。トレンガヌは、住民の大半がマレー人であり、しかもイスラーム重視の政党PAS(汎マレーシア・イスラーム党)の勢力が強い地域であること、海底油田の操業開始で地域内部や中央との間に軋轢が生じていることから、マレー人同士の対立を観察するのに適した地域となっている。さらに、漁業従事者が多いトレンガヌは、UMNOがどのようにして勢力をマレー農漁村に伸ばしてきたのかを理解するためにも恰好の観察地域である。

第三に、地道で厚みのある研究手法も注目に値する。トレンガヌ州で足かけ3年半にわたる長期定着調査を実施して、参与観察、住民への聞き取りをする一方で、役所や政治組織また現地図書館における文書の収集と閲覧、また首都クアラルンプールにおいては公文書や統計資料の閲覧などの文献調査を実施した。これら一連の調査活動は、開発と地方政治の解明に、政治学や経済学に加えて、人類学や歴史学の手法も用いており、学際性重視の地域研究にふさわしい。

第四に、1999年の選挙で州政権をPASに奪われたUMNOが、州政権奪回のためにどのような方策を用いたのかを「賞罰の政治」という表現を用いて詳細に解明している。UMNOが支配する連邦政権は、トレンガヌ沖で産出される原油からの利益の地元配分を強引に停止して州政権の財政を逼迫させる一方、村落に張り巡らした党の末端組織を通じて連邦政府直轄の開発事業を、州政府をバイパスして実施することで、UMNOからの恩恵を住民に配分して州政権を奪回している。この結果、多元的な「賞罰の政治」の仕組みが、UMNOの支配体制に、また受け手となる住民のなかに組み込まれていることを指摘した。

第五に、UMNO体制の特色の1つを開発政策ととらえ、開発がトレンガヌにどう浸透していったのかを辿ることによって、マレー人がUMNOや開発政策をどう眺めているのかを実証的に解明することに成功している。さらに、UMNO政権がもたらす経済的恩恵にもかかわらず、野党PASが支持される理由として、イスラームという宗教要因のほかに、利益政治は受益者の間にたえず不公平感を生み出し、そこからPASの支持者が出てくることを明らかにした。

マレーシアのUMNO支配体制を地方から実証的に解明しようと試みる本論文は、東南アジア地域研究の発展に大いに寄与しうると判断される。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年1月26日に、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降